君と私と君と僕

玲那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君と私と君と僕

【Ｎコード】
Ｎ０００５Ｘ

【作者名】
玲那

【あらすじ】
２次元大好き腐女子野郎が
何故か毛嫌いしていた現実（リアル）の男子に恋をした――――…？
一方その男子もヲタクで…。
２人のヲタクの恋物語です。

1話「私」（前書き）

取りあえず恋愛に挑戦してみようと思いまス
ひとつ注意しておきますが
普通の恋なんて物ではないでス
俺は普通というかありきたりが嫌いだったりするので
くっついてめでたしめでたしハッピーエンド
という終わりが大嫌いなので、とてつも無く歪んだ物語になるでしょう
そんな変わった恋物語（なのか？）にお付き合いください

1話「私」

大切ってなんだろう
思い出ってなんだろう
君と出会うまで現実(リアル)を見ようとしなかった私――――――――

「で、またそれの話？」
友人のあきれ顔

友人が言う「それ」とは
ある漫画のキャラクターの魅力という話
＝私、川崎(かわさき)　閖花(ゆりか)はその漫画の中毒者
世間一般で言うヲタク

これを見てる君
オタクではない。ヲタクだからな。
そこを間違えないでくれよ！！↑

そして腐女子という俗に言う「終わってる人間」（人間失格ｗ）
ある漫画のキャラクター
鈴音(すずね)　響(ひびき)と言う少年の魅力について、
毎日学校の行き帰り、１０分間の休み時間
そして５０分の昼休みにずっとされていれば呆れられるだろう
それを聞かされる方のこっちの身にもなってみろ！！

なんて友人は言ってるが
結構ノリノリだし話にも乗ってくれる

って事で懲りずにそのキャラの魅力を延々と語る
放っておけば1日中、下手したら1年中語り続けるんじゃないか？
と言う勢いでね

「仕方ないよ。響は格好いいんだから！！
響を馬鹿にする奴は許せん！！って言うか
てめぇ程度が響を馬鹿にすんじゃねぇ鏡みて来いって感じ？w」

この世の男子をかなり侮辱する私
そう言う私も鏡みて来いって話ですね

でも仕方ない、現実に響ほど格好いい人いないし
当然、現実（リアル）には好きな人はいない
だから服装もやる気なし
常時ジャージ
そして髪の毛はショートでボッサボサ
そりゃあ男と間違えられる訳だわ。納得
でもあだ名まで「少年」とか「男」とかはマジ勘弁

でも友人の恋バナとかには興味があったりする
あ、勿論からかう為にねb
え？性格歪んでる？
ありがとう♪

性格が歪んでるのなんて重々承知
人の不幸は大好物
という何と言う最低な野郎でしょう

そしてそれを表に出しているというね

おかげで皆から怖がられたり
この性格のせいで告白されたことはなく
まぁ顔が悪いのもあるんですけどね？w

好きになってくれる人も居ないし
嫌な奴ばっかり
って事で2次元（天国）に逝っちゃった感じ？
現実（リアル）なんてどうでもいいしw
しかし響格好いいふへへへへ

「はい。よだれ垂れてる気持ち悪い拭け」

マジか。よだれ垂れてるのか。
っつか気持ち悪いとは酷いな

「ほんっと閑花ってさ、もっとおしゃれするなり
おしとやかになるなり、性格かえるなり
それなりのことすれば絶対もてるのに」
「もてるわけないじゃん」
この顔でもてるとかマジないない（手ブンブン

「いーや、顔『だけ』は可愛い」

だけをそこまで強調しなくてもw酷いなぁw
まぁ気にしてないけどw

「いやーね？私はこの性格を変える気はないよ

ありのままの私を受け入れてくれないと。ね」

「まぁ…ね」

渋々認める友人Ａ（（名前つけてやれよ

「だから私は全てを受け入れてくれる響が大好きなのだ！！

愛してるぞ響ぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」

「だからそっちに持っていくな馬鹿野郎ぉおおおおぉ！！」

そんなこんなで今日も元気です

1話「私」（後書き）

きっと「あ～私もそう！！」ってなった人も居るでしょう。
腐女子、ヲタクなら分かってくれるはずです。又自分も同じように分かります

2話「僕」（前書き）

今回は男の方の目線でス
男子の方も女子と同じヲタクでス
生温かい目で見てやってください

2話「僕」

初めまして
俺は濱野（はまの）　英勝（ひでかつ）って言います

なんて丁寧にあいさつしてみるけど、
俺は適当な人ですよ～

「英勝行くぞー」
俺の友達

友達は多い方だと思う
フレンドリーに生きてるからだろうか
それにしても気づけば沢山人が集ってるのには吃驚（笑）

ただ勉強は下の中
大して頭は良くない（って言うか寧ろ馬鹿？w）な俺です

「いや～ホント未来ちゃん可愛いよな～／／／」
俺達が好きな（結構マイナー）漫画のキャラクターのヒロイン
花咲（はなさき）　未来（みらい）ちゃん！！
彼女は最高です！！

可愛いし、声もいい♪（あ、アニメ化してますよw）
「ホントこの世の女子も未来ちゃん見習ってほしいよなー」
はい、ボロッカスに言ってます（笑）

俺も人の事言えないんだけどね

数回告白された事はあるものの
そんなに格好いいわけでもないし…な
別に現実（リアル）の女子が嫌いな訳じゃないんだよ
ただただ告白してくれた人が好みじゃなかっただけ←最低

って事で彼女はいません。そして作ったこともありません

「Ｉ　ＬＯＶＥ　２次元！！」

なーんて常に叫んでおりますよ。はい

そして女子の皆さんはそんな俺を引いた目で見てきます

２次元なめんじゃねぇ！！
「こんな奴可愛くないし～」
とか言った女子。鏡みて来い鏡
てめぇなんかの数１００倍可愛いからｂ

２次元が好きだとか
ヲタクだとか

そんな偏見差別的な目で見てくるし
そういう奴大っ嫌い
マジ近寄るなって感じでス

昔俺の友達をヲタクだからっていじめてた奴をぼこってやった
女子も居たけどそんなの関係なし。

いじめてる奴に男とか、女とか
そんなの全く関係ねぇ

女子＜友情＆ａｍｐ；未来ちゃん
ですね。俺の中では

さーてと
今日の授業はつまらないやつばっかしだし
持ってきた音楽プレイヤーで音楽聴きながら
俺らの天使未来ちゃんが出てくる漫画でも読んでおきますかー

2話「僕」（後書き）

一応女なんで男の気持ちは分かりません。
って事で適当に書いてまス

3話「出会い」（前書き）

女目線と男目線が出てくるのでごっちゃになるかもでス。
取りあえず頑張りまスね

3話「出会い」

「うー重たー」

私は今、大量の資料を抱えて廊下を歩いている
勿論これは趣味の（絵を描く）為の資料である
つまり、暇つぶしの為に私の愛する（笑）響の絵を模写しようと言うのだ

「前見て歩けよー」

大丈夫。私はもう中3だ。
事故るような事は多分ないだろう。
って事でルンルン半スキップ状態で廊下を歩いていた
階段を上がる為に角を曲がった――――――――――――

ドンッ

「「いつつ…」」
誰かとぶつかった様で資料をぶちまけてしまった
ついでに尻餅ついた。クソいてぇ。

「ごめん…大丈夫？」

ちっくしょー…
未来ちゃんが出てくる漫画を落としてしまったじゃないか
ってかまず学校（中学校）に漫画持ってきてるのばれた時点でアウトじゃね？
うわやべー…
立ち去らなけｒ――――――

「あー！！未来！！」
突然叫び出すある女
誰だこいつ

「この漫画良いよね！！響が格好良さ過ぎてもうｈｓｈｓ／／／！！」

はれ？
この女…この漫画知ってるのか？
珍しいなぁ…

「閑花…この人引いてるからやめなさい」
ポンッと閑花と呼ばれる女の肩に手を置く

「この漫画知ってるの？」
響が出てくる漫画を持ってきてたであろう男がそう言った

「勿論！！鈴音響は俺の嫁！！未来も可愛いしホントもう最高！！」

そうニヤニヤしながら言った
すると――――――――

パシッ

手を掴まれた

「未来ちゃん良いよね！！話合う人初めて見た！！」
この少年は私と趣味が合うようだ。
とても興味をもったぞ。うむ

「この漫画好きなんだね！！ところで誰？何年生！？
みた事ないから中１か中２だね！？
その身長だと――――」

身長は大体１７０ｃｍ位であろう
少し高め（なのか？）
身長が１４５ｃｍ弱しかない私にとっては羨ましい

「分かった！！中２でしょう！？」
ビシッと指をさして言う
指をさすのは失礼でしょ。やめなさい
なんて言葉は聞かない
だって私は非常識極まりないかｒ（ｒｙ

「え…？」
この女何勘違いしてんの…？
俺中３なんだけど…

っつかこいつも中3！？
みた事ないぞこんな奴

「閑花、閑花。ちょいちょい」
友人は私を手招きして私の耳元でボソッと呟く

「この人…中3…ってかあんたと同じクラスの男子…」
「えええええええ！？」

私こんな人みた事ないんですけど！？
どういうこと！？

「って事は中3なの…？」
コクンと首を縦に振る

マジかよ
なんか私すっげぇ失礼じゃね！？
なぁ。失礼じゃね！？（（煩い

「って事は3ー3…？」
またまたコクンと首を縦に振る

知らないぞこんな奴…
向こうが知らないのは仕方ないかも知れないけど…

あぁ…そう言えば言ってなかったね
私はクラス内では静かな子として過ごしてる
いじめられてるから…ね
だからすっごい地味で静かに過ごしてるから知らないのも無理はな

い…はず

「名前は？私は川崎　閑花」

「俺は…濱野　英勝。皆から英(ひで)とか英勝って呼ばれてる」

そしてお互い手を伸ばしてグッと強く手を握る

「「これからよろしくね。お仲間さん＾＾」」

取りあえず笑顔で締めくくり

4話「日常」（前書き）

いじめありでス。そこまで酷くはないですがw

4話「日常」

昼休みも終わり教室に戻る
私の席は窓側の一番後ろ
かなり孤立している所

そんなに私を孤立させたいのかね？
まぁここなら授業中遊んでてもばれないから良いんだけどね
馬鹿みたい
っと少々鼻で笑う

さてと、次は社会だったかな？
後ろの棚に教科書とノートを取りに行く

私は後ろの棚に全教科の教科書とノートを入れている
＝家に持ち帰ることはない
＝勉強はしていない

まぁ置いといて、教科書を取り出して席に着く
「…」
もしや、と思って教科書を開く

案の定「死ね」「消えろ」「殺すぞ」
「学校来るな」「この世のクズ」「ヲタク死ね」
等の文字
そして日本国憲法の部分全部がちぎられていた

馬鹿じゃない？

私は教科書の内容全部覚えたからこんなことしても意味ないんだけどね

そんな感じの私です
そりゃ恨まれますかね？

フッと斜め前の席をみると
濱野　英勝が居た（めんどいから次から名字呼び捨て）

あ、ホントにこの学年のこのクラスの奴だ
っておいおいおい
漫画読んで音楽聴いて…自由人か！！

ってか見つかったらやばいんじゃ…？

「えーテストを返すぞー」
？って先生気付いてないのかよ

「濱野　英勝！！」
大声で名前を呼ばれてるにもかかわらず
無視（というか音楽のせいで聴こえてないのか？）

「おい！！」
バンッと机をたたく

「あぁ？」
かなり不機嫌そうな顔で睨みつける濱野
うん。私そういうキャラの子好きよ。響みたいでb↑

「あぁ？お前テスト２３点の身で調子こいてんじゃねーぞ」
おいおいテストの点数暴露して良いのかよ先生よ
ってか点数低っ

「あぁん？てめぇまた閉じ込められてぇのか？」
お前何やってんだw
ビクッと多少なっていたが負けじと先生も反論

「逆らうなら退学にさせるぞ？」
そんな脅しは効かないでしょ先生。
はーめんどくさい
仕方ないなぁ…

ガタッ
「お？川崎どうしt」
ドガッ

「いっいでぇぇぇぇぇぇ！！」
先生は悶絶した
え？何をしたかって？

先生は男だよ
男の大切な急所を容赦なく蹴りあげただけだよ（ニコッ

「先生。さっさとテスト返却してください、うざい」

取りあえず蹴られたところを抑えて涙目で座っている先生を容赦な

く言葉で攻撃
冷たい目で睨み冷たい言葉を投げかけ見下す↑

「う…あぁ…川崎…」
プルプルと手が震えてる
震えている手から私のテストの答案をひったくる

９８点
ちぇ。惜しいなぁ

「川崎何点よ」
悔しそうな顔を見破ったのかね？
濱野が聞いてくる

「あんたの４倍＋６点だよ」
そうシレっと答えて席に着く

あーあ。つまらない毎日だなぁ
で、椅子にもたれかかったところ

チクッ

「痛っ！！」

なんか刺さったのか！？
って事で後ろを振り返れば大量の画鋲
…暇人かよ

まぁいいや

「テストも返し終わったし席替えでもするか」

先生まだ足元ふらふらして覚束ないようですね

すみません。空手2段の癖に蹴ってしまって。はい

で、席替えの為のくじ引き。

場所は変わらず

でも横の人が変わった

「よろしくなー^^」

何故濱野なんだ

まぁ良いんだけどね

5話「激怒」

席替えして早1週間
毎日のように濱野と
「文化部！！」と言う漫画の響と未来について語り合い

「いや～ホントもう陽神（ひのかみ）　霧梦（むむ）先生最高！！」

霧梦先生とは「文化部！！」と言う漫画を書いている人だ
顔、体のライン、ありとあらゆるところが上手い

キャラも良いし絵もうまい。最高である

「未来ちゃんも良いけど梓（あずさ）もよくね？」
濱野の友達も話に入ってくる

梓とは、？　梓（おいかけあずさ）と言う「文化部！！」
のキャラである
個人的にはかなりお気に入り

「分かる分かる！！」
今は総合の時間とは言え授業中
騒いでて良いのか？という感じだが
どうやら先生は私と濱野が怖い様だ

近寄ろうともしない

キーンコーンカーンコーン
授業終わり、そして昼休み始りのチャイムが鳴る

「あれ？川崎今日も１人？」
「うん」

クラスに友達ってか一緒に食べてくれる人居ないしね

「なら一緒に食わね？」
「良いの？」

「「「「「「どうぞー」」」」」」
あらあら、友達の皆さんも許可してくれるとわ

って事で
「おじゃましまーす」
しかし男子２０対女１人（私）っておかしくね？
割合、割合。
いやーホント濱野羨ましい
友達たくさんいて、皆群がって
いつも騒がしい

私とは正反対…

「ギリッ）川崎　閑花…許さないッッ！！」

―――――――――――――――――――――――――――――…

昼休みも終わり教室に戻る
フッと机の中を見た

「あれ？ない…ないッッ！！」
今までで一番上手くいったであろう
響と未来と梓の模写絵
そして響の資料…

気付けばスクールバッグやノートも無い

「嘘ッッ！！」

外を見れば雨

ヤバいッッ！！

そう思い立ちあがり教室の外に出た

―――――――――――――――――――――――――――――…

「あと…1つ…」

プールに無惨に捨てられていたノートは拾った
木に掛けられてあったスクールバックも拾った
ゴミ箱に捨てられてあった響の資料も拾った
焼却炉に捨てられてあった筆箱も拾った

でも、でも―――
今までで一番上手くいった響達の模写絵が見つからない
「なんで…なんでないのよぉ！！」
雨でぬかるんだ地面で何回もこけた為制服はドロドロ
湿って気持ち悪いのだろうに着替えずに探す
着替えの体操服もプールに捨てられてあって濡れていて着れないのだ
ドンッ
「あっ、すみませ…」
「川崎？」
なんて運の悪い…なんで濱野が…
「川崎？」
「ハッ）」
濱野の声で意識が戻る
探しに行かなきゃ！！
濱野を無視して走って行った
「…あいつ…泣いてた…」
「え？」
「行かなきゃ！！」
「えッ！！おい！！英勝！！」

――――――――――

考えろ、考えろ
どうする…？何処にある…？

フッと頭に浮かんでくる映像
「地面…」

あれだけ探したのにないのだ
地面に埋められてるかも知れない…
地面をキョロキョロ見渡すと
一部、最近掘られたような
そこだけ周りと色が違う地面があった

ここだ！！

スコップでザクザク掘る

お願い、あって。お願いッッ！！あってッッ！！

「川崎！！」

振り返るとそこには濱野

「何…？」
いつもの冷たい目で見る

「どういうことだ…？」
「どうもこうもこういうことで。
いじめられてるだけですよ。うぃ」

あり得ない…そんな目で見てくる
「まじかよ」

嘘つく意味ないでしょ？馬鹿じゃないの？
キッと睨んで続きを掘る

ザッザッザッ
積もる土
汚れる制服
約５０ｃｍ程掘ったところにビリビリに破かれた模写絵があった

「響ッッ！！」

嬉し涙か悲し涙か
分からないけど涙が頬を伝う

「友達は…？」
「…ぶつかった時に居たあの子だけ。
他は居たけど敵にまわったり、情報だけ引き出して裏切ったり
仲間のフリしてて陰で悪口言ってたから…
辛くて抜けた…」

そう…私は独り

友達なんて居ない…要らない…

「お前…平気なのか…？」

「小学校の時から。もう慣れた…」

顔をあげてシレっと答えた

パァン

「いたっ…」

「馬鹿か…」

どうやら濱野が私の頬を殴った（ってか平手打ち？）様だ

よく見ればポロポロ涙を流している

男子の癖に弱っちい

「そんな酷いことになれるな！！

もし辛いことがあったら俺が助けてやる！！

俺に頼れ！！俺達仲間だろ！！」

勝手に決めるな。

ってツッコミたくなったが置いとこう

しかし濱野が怒るなんて…

「川崎…俺はムカつくぞ。

ヲタク差別して、いじめて、笑ってる。

そんな奴許せねぇ。ぼこってやるッッ！！」

6話「教室」（前書き）

題名特に意味はありません。うぃ

6話「教室」

絶えず振り続ける雨
俺と川崎。お互いの体の芯まで冷やす

「…な」
「ん？」

声が小さすぎてなんて言ったのか聴こえなかった
「余計なことすんな！！」

「うぉッ！！」
いきなり大声を出したと思えば俺の胸倉をガッと掴む

「お前が要らん事していじめが酷くなったらどう責任取る？
あぁ！？お前のは唯の有難迷惑だ馬鹿！！」

ムカッとして俺も川崎の胸倉を掴んだ（変態ではありません。はい）

「じゃあお前はその現状を受け入れてあきらめんのかよ！！
誰にだって幸せになる権利はあんのにお前は掴もうとしないのかよ
！！」

だっておかしいじゃないか
何故こいつばっかり？
唯小学校の時からヲタクとして生きてきただけだろ？
恋愛対象が、ただただアニメ、漫画キャラだっただけだろ？

それがいけないのか？
なんで…何故！！
掴んでいる手に余計に力が入る
「や…やめ…ろ…
千切れる…」
「は？」
ビリッ
どうやら手遅れ
川崎の制服は破れた
「あ／／／／ごめっ！！／／／／」
ヲタクと言えど俺も健全な男子。
現実でそう言うのを見るのは初めてです。（親ぬきでね）
川崎から目をそらす。
「…替えの着替え」
「あ…ごめん」
取りあえず着ていた制服（カッターシャツ）を脱いで渡す
濡れてるけど我慢してください。はい
約１０秒後
「着替え終わった」
？早っ
そう思ってしまったのは言うまでも無いだろう

振り返ると俺の制服を着た川崎（当たり前）
流石２５ｃｍ位の身長差だ
俺のカッターシャツはダボダボのよう
ヤバい。可愛い
現実でもダボシャツは萌えるのか

「チッ）何みてんだよ」

前言撤回。喋らないときのみ可愛いみたいですね
なんだこの口の悪さ、可愛いのにもったいない

「っくそぉおおおぉおおぉお！！」

バァン

川崎が木を蹴った

メキメキメキ
ズドーン

木はメキメキ音を立てながら倒れた
えっ強ッッ！！

「…力だけは異様にあるんだよ。」

へー納得…

出来るわけないだろ馬鹿野郎ぉぉおおぉお！！

女子ってか人間の力じゃなくね！？
え！？おかしいだろ！！

ダメだ。俺今日から川崎恐怖の対象でしか見れねぇ
こいつは怒らせないでおこう。
そう心に誓った（（誰だよ

「取りあえず教室帰るか」
「…あぁ」

うわー口調も男っぽー
無駄にイケメンだな。おい

――――――――――…

「川崎は？」

「「「「サボりでしょー」」」」
女子軍がクスクス笑いながら声を合わせて言う

「はー…あいつ成績は良いのになぁ
内申やばいんじゃないか？
提出物ちゃんと出してないし…」

ガラッ
「どうもー」
おや？さっきまで煩かった教室が静まりかえったぞ？

「濱野ッッ！！」
おやおや。思いっきり嫌われてますね。俺

そんなに睨まなくても。
見つめないで。気持ち悪い（（

「ッッ！！」
「どうした川崎？」

「…別に」

はー…こいつは本心を俺にさらけ出してくれないのかね
こりゃあ信用してくれるまでにまだまだ時間はかかりそうだな

7話「落ち着け」

「はい。あーん」
私の周りにたくさんの女子が群がっていた
お菓子をあげようとしている場面
学校にお菓子持ってくんじゃねぇよ（人の事言えないがね）

「そんなもん要らん。近づくな」
仲いいってのを見せようってか？
馬鹿らしい

ザワッと男子軍がざわめく
そうか…
男子軍は私がいじめられてること知らないのか（濱野以外）…

「ほら食べなよ」
おはぎ（らしきもの）を口の中に突っ込んできた

ジャリ――――――

どうやらそれは泥で出来た泥団子だったようだ

「ゲホッッ！！ゴホッッ！！」
「もー閑花食べ過ぎよー（笑）」

泥団子無理やり食べさせて笑うのかよ！！

ふざけんなッッ！！

ガァン

私の机を蹴った
私の机に座ってた女子（数人）が机と共に倒れる（ざまーみろ）

「いったぁい！！ひどぉい！！」

気持ち悪い声出すんじゃねぇよ気持ち悪い
吐き気がするぜ馬鹿野郎

「あーん痛いよぉ（泣）」

嘘泣きキモイよ乙

「ちょ…酷過ぎるだろ…」

あーなるほどね
つまりは私を悪役にしたかったのか

…ふざけんなッッ！！

「いい加減にしろ」
ガタッ
濱野が立ちあがった

「英ぇ！！こいつやっちゃってよぉ！！
いじめてくるのぉ！！（泣）」

ふざけんな。いじめてんのはてめぇらだろ

涙目（嘘泣き）の女子を放って
私の後ろに来て私の肩に手を置く

「あのさぁ…
いい加減にしてくれる？」

「なっ何のこと！？」

自分でやったことも分かんねぇのか馬鹿が

「唯こいつが二次元好きだっただけだろ！！
唯漫画ヲタクだっただけだろ！！
ジャニーズヲタクと違うのか！？
なんで漫画ヲタクだっただけでいじめられんだよ！！」

ごもっともです濱野君

「人をいじめといて知らんフリかよ！！
人の幸せ奪っといて平然と生きてんのかよ！！
そんでいじめられてる川崎を悪役に仕立てて満足か！？
川崎はあり得ねぇけど（おい）自殺したらどうすんだ！？
責任取れんのかよ！！」

「な…なんのことぉ！！」

ブチッ
今の一言で完全に濱野の理性が吹っ飛んだようだ
「っざけんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！」

女子に殴りかかる
最低なんて受け付けないよ
男女平等社会で暴力に関してだけ
女子が男子に奮う分は良いのに男子が女子に奮うのダメだなんておかしいじゃないか

「ふざけんなッッ！！ふざけんなッッ！！
川崎の今までの人生返してやれよッッ！！」

あーあ
馬鹿だ…ホント馬鹿
でもこんな馬鹿…

嫌いじゃないよ

「私も混ぜろぉおおぉぉおお！！」
取りあえず私も参戦
濱野に加勢
２対２０なのに段々女子軍は減っていく

弱っちいなぁ

「英勝が切れてるって事は
その女子軍が悪いんだろ？
俺らも混ぜろよ」

「「「「「おらぁあああぁぁあああぁ！！」」」」

――――――――――――――――…

「やめッッ！！ごめんなさッッ！！」
「泣いて謝れば許されるとでも思ってんのか！！」
泣いて謝る女子にまだ容赦なく殴り続けている

おいおいおい

って事で濱野の肩にポンと手を置く

「私の事ならもういいから…落ち着け」

8話「私の過去」

先日の濱野の一件により
私は平和になった――――はずがないだろ馬鹿
私は余計窮地に立たされた状態
物を盗むとかだけじゃなくて遂には暴力まで
日に日にボロボロになってく私に濱野は謝る
「ごめんな。俺があんなことしなかったら。
結局お前が正しかったな」

シュンとしている
可愛いな
響程じゃないけどね！！（ドヤ（（

「いいよ。気にしない」
「ッッ！！でも、ごめんな…」

…誰にも言ってないけど濱野には話してやろうかな？

あ…気づけば私
濱野を信用してる…

人間なんて嫌いな筈だったのに…――――

「ねぇ濱野」
「ん？」
「濱野はさ、５年前何してた？」
「５年前って…小４？」
「そう、小４」
「ゲームかな。俺ゲーム好きだし」
「へぇ…」

羨ましいなぁ…

「川崎は？」
「覚えてない」
「は？」

聞き間違え？
と言う風に聞き直してくる
いや、合ってるからね

「私ね、５年以上前の記憶がないの。それでね、親にも虐待されてるの」
「……は？」

突然の言葉に唖然とする濱野

無理もないだろうね

笑ってるから――――

――――――…
5年前、交通事故にあった
その日から前の記憶がない
運良く生き残る事が出来たけど、私は右側の肺を無くした
って言うか臓器がほぼ全部、半分使い物にならなくなって、手術てとった

胃も小腸も大腸も
肝臓もすい臓も肺も
ギリギリセーフだったのが心臓だね
心臓に棒が突き刺さってたけど唯一無事だった

そんなこんなで食べれる量も少なくなった
運動もある程度しか出来なくなって、折角2段まで取った空手も辞めた

そしたら今まで趣味にしてたもの全部無くなっちゃって…
だから漫画に行っちゃったんだ
その場しのぎの暇つぶしの為
私の寂しさを紛らわせる為に…

そしたらどっぷりハマっちゃってね（苦笑）
でも、だからこそ私は楽しく生きられた
まぁ…今度はヲタクになったからっていじめが勃発したんだけど（笑）

――――――…

「どう？私の過去」

誰にも話した事ないんだけど、何で濱野には話せたんだろ
不思議だなぁ…

「…なら、尚更納得いかない。っていうか虐待！？」
「包丁突きつけられたりとか、ご飯与えて貰えなかったりとか殴られたりとか。お陰で人格変わってこんなになっちゃったけどね（笑）」

だからかなぁ
幸せな人が嫌いなの
だから不幸なのが嬉しいのかな
だから人の不幸は蜜の味って…

9話「過去」

どうして川崎が…？
なんで川崎だけがこんなに傷つかなきゃいけないんだよッッ！！
なんで川崎を助けれない？
目の前に居るのに…

目の前で助けを求めてるのに――――ッッ！
俺は……無力だッッ！！

「…濱野のせいじゃない。気にしなくていいんだよ（ニコッ」
「――――ッッ！！」

初めて見る川崎の笑顔
それが、何でここで――――

――――――――――…
「ども。濱野　英勝さん？」
俺の事をきちんと覚えてないのだろう
川崎の唯一の友達が挨拶してきた

「ども」
俺も軽く挨拶

「えーっと、この前（？）閑花がシャツを借りたみたいで…？」

「〜〜〜〜〜ッッ！！／／／」
この前のあの場面（制服破れた所）が甦る
決して変態な訳ではないです。はい

「もしかしてみちゃいました？」
ええ。はいバッチリと（（
しかしあいつ貧乳だな（（

「恥ずかしがりました？」
「あ…まぁ……多少…」
「わぉ」

何やら驚いた様子
どういう事だ？

…と言うこちらの表情に気づいたのだろうか
ニヤニヤしている

「気になりますか？（ニヤニヤ」
ニヤニヤされると余計気になりますよ奥さん（（誰だ

「んじゃま、秘密ですよ」
秘密を話していいのか？
ってツッコミたくなったがスルー
こいつらと関わるんだったらスルースキル位身に付けないとな。うん

「いやー閑花はあんたの事を信用してる、1人の人間として1人の
異性としてみてるらしい」

直球で言われると意外と恥ずかしい物だな。

「閑花は…」

小学生の時に犯されたから…――――

「……は？」

聞き間違えか？

聞き間違えであって欲しいが…

「いいえ。聞き間違えではありません」

マジかよ…

――――――――――――…

流石小学生

善悪が分かってないらしい

プール上がりによく着てた服、下着などが盗まれた

それが川崎の手元に帰ってくることはなかったみたいだ

どこぞのマニアに売られたらしい

いやはや最近の小学生は恐ろしい

んで、言いにくいが…

裸のまま人前に晒された事も多々あったみたいだ

で、高校生位の人に売り、買われ、犯されたみたいだ

つまり全くの被害者だな

川崎は

もう裸を見られるのはなれた。と

少々投げやりになっていた

――――――…

「だから恥ずかしがったから、信頼があると？」

「まぁぶっちゃけそうです」

ハッ馬鹿馬鹿しい

でも何でだろう

すっげぇイライラするわ――――――

10話「平和」

「おはよう」

何時も通り無表情……と言うわけではなかった

微笑で挨拶

「うえぇぇぇぇぇ!?」

そこまで驚かなくても濱野君

驚く要素あるかね？

まぁ何か変に狂った（酷い）濱野を放って席に着く

で、お気に入りの歌手の歌を聴くために音楽プレーヤーを持ってきた。

って事で聴こうか

イヤホンを耳にはめ

「文化部！！」の漫画1巻を鞄から取り出し、足を机に乗せ

家か！！って位寛ぎながら漫画を開いて読む

スカート？

あぁ、大丈夫。

脛あたりまでのロングスカートに加え体操ズボンをはいてるからなズボンはいてる方が動きやすいんだよ。（主にボコりやすい）

濱野はそれを知らない様だ（当たり前）
こっちを見て口をパクパクさせている
口パクで伝えてるつもりだろう
大丈夫。理解はしている

「ん？何だ濱野。」
理解してるが嫌がらせと言うかなんと言うか…
まぁちょっとした遊び心？（笑）

「だからぁ…」
口をモゴつかせている。
面白いな。からかうの

「ん？スカートの中でも気になるのか？」

ピラッ

「ぶはっ／／／／」

ズボンはいとるのに
馬鹿と言うか純粋と言うか
こういう奴ほどいじって楽しいものはない！！↑

あ、この響やべぇぇぇぇぇぇ！！
めっさメソだ！！
胸キュンだ！！一家に1台欲しいぞ！！
ひびきゅうううううううん！！（自重

あ、血洗(ちあらい)好喜(こうき)！！
え、やべぇ響好(ひびこう)フラグぅぅぅぅ！！（自重

――――――…
「川崎…川崎！！」
濱野の声によって現実に引き戻される

やべぇやべぇ妄想がふへへへへ
「よだれ垂れてる！！」

妄想のしすぎか。
やべぇな。取りあえず拭いておこう。ゴシゴシ（ｒｙ

「…濱野ってさぁ」
「何？」
「ケータイ持ってんの？」
「持ってるよ」

やっぱりかぁ
持ってそうな気ぃしたわぁ

「川崎は？」
「持ってる」
「じゃあメアド交換する？」
「…するか」

ってか両者学校にケータイ持ってきてみたいだから赤外線で交換
完璧不良だなぁおい

「あーこの前のテストの結果だが、廊下に張り出してるからな」
あぁ、そういや中間テストしたなぁ。ってかあんた。教師だろ。
あんたの目の前で思いっきり私と濱野、ケータイだしてんだけどいいのか？

「見に行こうぜ。濱野」
取りあえず結果を見に行く
「よっしゃ！！取りあえず下から５０番目には入ったぞ！！」

って事は上から２００番目かよ
低レベルな争いしてるなぁ
なんて呆れながら私は私の名前を探す

「川崎見つかった？」
あぁ、あったよ。
と言う風に指を指す
「へぇ」

何位だろう
そう言う目で見上げ――――

――――――…

「…えーっと川崎さん？貴方頭いいの？」

「上位だけど」

「２５９人中１位て！！脳内バグってんじゃねぇの！？」

そんな事言われても困るよ

１１話「夜中の暇つぶし」（前書き）

特にストーリー上には関係ない話です。番外編みたいな…違いますけど

１１話「夜中の暇つぶし」

６／２４　３：３９

畜生
何故だ…何故なんだ……ッッ！！

って言うこと（どういう事だ）でこんにちは（＾Ｏ＾）／
響に恋する乙女（腐女子）な閑花さん１５歳です（（

いやぁ…ね
分かります。分かりますとも（（意味不明
今年からこの学校のこの学年（つまり中３）では
「リア充」
と言う言葉が流行しています。

私が去年隣の席の男子に「煩ぇリア充爆破しろ」と言った所
「リア充って何？」と聞かれたので
「恋人が居る人は基本リア充とよぶのさ。リア充じゃない人も居るけどね。現実（リアル）を充実してるやつは全員リア充さ」

って言った所
そこからリア充という言葉が広まりましたとさ。

って話なんですけどね

ぶっちゃけネットとかアニメとか漫画とかにのめり込んでない奴等がリア充とかネット用語使うなって感じです。

え？ない？

まぁ私はそうなのです。

で、何故でしょうか

元リア充共が現リア充を羨んでか憎んでか知りませんが

「リア充撲滅運動するか」

と言う話になってますとかそんなん。

私の第一声

「潰すなやッッ！！」

わざわざ潰さんでもいいでしょ！！

私もリア充爆破しろとか思ってますよ？思ってますけどね？

いやでも潰さんでもいいでしょ

私優しいからそんな鬼畜な真似出来なi（（黙れ。

そんな私の七夕の切実な願い

「リア充爆破しろ」

はい、実際に書きましたよ。えぇ書きました

イチャイチャして迷惑なリア充のみ爆破して戴いて結構です

恨まれる？
どうでもいいです。

私には友人と響（っていうか霧梦先生かな）さえ居ればいいのだぁッッ！！
恋人は響だから☆

……なんて厨2臭いってかキモイってか馬鹿？
いいえ仕方ありません
それが私です。

ぶっちゃけ
この世の男子の格好いいが分からない。キモイとか不細工は速攻わかるけど
好きが分からない。二次元しか分かりません。
響は俺の嫁です響に勝る人なんざいません

そりゃ理想高すぎて恋人なんか出来ないよね
別にいいけど

一生独り身でいいと思う私は死んだ方がいいのだろうか

…まぁそう言うのは人の価値観によって違うからどうとも言えないよね？

だから私は今日も響の【自主規制】の画像や響と好喜が【自主規制】画像とかを探すのです

さてと…もう遅いからねようかな？

お休みなさい
お相手どうもありがとうございました

では

――――――――…
「なんつーもん夜中に送りつけとんじゃ！！」
「え？ダメだった？」

先程の文章をお覚えでしょうか
そう。今日（６／２４）に暇さの余りに濱野に送りつけたメールです

迷惑でしたでしょうねー

…よし。また送りつけるとするか↑

12話「告白」

「英……ちょっといい？」
「え？んー」

川崎と文化部！！について語り合いをしていた
それを見ての呼び出し
ぶっちゃけこう言うの嫌いだな
割り込んで入ってくるとか

話してた川崎にも悪いし
そう思って川崎を横目で見る

目が合った川崎は
「さっさと行ってこい」
と言う風にニッコリ笑った

いや、オーラが物凄く怖い
冗談抜きでさ

「んーまぁいいよ」

――――――…
ただいま裏庭
蚊がブンブン飛んでますはいウザイ
呼び出した子。お願いだからさっさと用件言って

川崎待たしてるから悪いし暑いし蚊がウザイ
顔赤らめてモジモジしなくていいから用件さっさと言って
用事終わらして帰りたいの。お分かり？

「あのね…」

やっと口を開いた
口を開くまでの所要時間およそ5分。貴重な休み時間がぁ！！
いや、女子は別に嫌いじゃないんだけどね。ほら、川崎に悪い（ry

「私…英の事が好きなの」

……は？
ちょっと待って？
ん？
好きです？え？告白？

え？川崎との話割いて、散々待たせて
え？好きですだけ？

ないわー
空気読めよ

「ごめん無理」

大分オブラートに包んだ振り方
…だと思う。

「好きな人が居るから？ねぇ？」

あ、うぜぇ。こう言うのないわ。対応めんどくさいし自分がフラれたのが好きな人（又は彼女）が居るからーってか？嘗めるなよ

「俺は川崎と文化部！！の話盛り上がれるだけで十分です。貴方は必要ありません」

ボー然としてる彼女を放って教室に帰る

「また…結局あの子なの！？」

――――――…

「おかえり」と言う風にニッコリ笑う川崎

あぁ、全然こっちのが可愛いし全然いいわ。

なんて思いながら席につく

「どしたの？」

「ん？」

「疲れたよな顔してる」

んな細かい所にまで目行くんだ。凄いな。どこぞの俺を好きだって言ってた女より全然俺の事見て、理解してくれてる。

「んー告白されたー」

「うわスゲー」

んな事ないって。告られていいことなんかないよ（手ブンブン

その後も川崎と文化部！！の話で盛り上がる。
受験生なのにやりたい放題やってるな。俺ら（主に俺）。

そういや川崎は何処受けるんだろうか
そういや川崎は全国１０位内の実力は持ってるみたいだ。
そんな感じのテスト受けて、その結果を見させて貰えば全国５位
いやはやあの方の脳内バグです。

こんな馬鹿な俺なんかが川崎とつるんで（喋ってて）いいのか？

１３話「君」（前書き）

これは濱野目線の「君」です。どうでもいいですがこれはＰＣで書いてます。ＰＣの方が全然やりやすいです

13話「君」

「あのね…」

――――――――――――――――――…

ある子を振ってから約2日。何故だか教室に不穏な空気が流れている。
そう、唯の噂。唯の嘘。
川崎が「誰か」の好きな人を知ってて、その子から川崎が好きな人を奪ったなんて。
そしてそれで平然と過ごしてるなんて…
ざまーみろって嘲笑ったなんて…

唯の噂に決まってる――――――…

振り返ろう。ってか考えよう。
ここからかなり酷いこと言うかも知れないが…

「あの」川崎だぞ？
ないないない

まず現実に好きな人が居ない。
彼氏がいるわけがない。（かなり失礼だろうが。いや、彼氏が居たら俺なんかと居ないで彼氏といるでしょ。うむ）
ざまーみろなんて嘲笑うわけがない。響を見てｈｓｈｓしてる様な馬鹿だぞ？（だから失礼）
リア充爆破しろって常に言う奴がリア充なわけねーだろ？

響ＬＯＶＥだぞ？彼氏嫉妬するだろ。
後あんな変態腐女子を好んで彼女にする奴居ないだろ。俺以外↑

ってかそれよりこっちが本音。
可笑しな点があると思わないか？

川崎は「いじめられてるんだ」ぞ？
女子の皆さんから「嫌われてる」んだぞ？
当然女子間で行われてる話なんか、恋バナなんて知る由もないだろ？

なんで川崎が「誰か」の好きな人を知ってるんだ？
川崎は好きな人を奪うような奴じゃないだろ？

だったら…だったらなんで――――――ッッ！！
そもそも…

「誰か」って誰だ？――――――――――…

「あいつ××の好きな人取ったんだって」
「うわ…最低ッッ…」

段々広まって行く噂。
何故嘘だって気付かない？
ちゃんと川崎を見ろよ。見てやれよッッ！！

何処をどう見てそんな酷い奴に見えるんだ？
大体関わってる男子は俺だろ？
いや、その俺に合わせて俺の友達も沢山関わるけどさ。

川崎を見れば「闇」
俺と楽しそうに文化部！！の話で盛り上がってた時の目とは違う。
濁った暗い何も映さない虚ろな目…

「大丈夫」

そう言っても顔は笑わない。
いつしか又笑顔を忘れた様。

そして追い打ちをかける声。罵声。

「謝れ」「土下座」「死ね」「死んで詫びろ」

やめろ…やめろ…やめろッッ！！
何故そんな言葉を平気で言える。
川崎をこれ以上傷つけるなッッ！！

笑顔がどれだけ眩しいか知ってるか？
どれだけ傷ついてるか知ってるか？
川崎の傷の直し方をしてるか？

直し方を知らない物をこれ以上壊し続けるのはもうやめろ――――ッッ！！

「もう川崎と関わるな」
「川崎と関わると価値が下がるぞ」

俺の友達達の声。
やめろ…やめろッッ！！
川崎を悪く言うなッッ！！

離れたければ離れればいい。
俺は川崎と居たいから。
価値が下がろうが、嫌われようが、そうなったなら友情は上辺だったってだけ。

お前らには守ってくれる奴がちゃんと居るだろ？
支えてくれる奴が沢山居るだろ？

それが居ない川崎を誰が助ける！！
俺が助けないで誰が助ける！！
俺が逃げて、逃げて、逃げて。沢山友達が居る俺が、たった1人しか友達がいない川崎を置いて逃げて。助けなくて。どんな最低野郎だ。

お前ら友達が居るだろう
沢山沢山仲間が居るだろう？
居ない奴の気持ちが分かるのか。
だから俺は――――――…

「川崎」
下を向いてる川崎に話しかける。
川崎が顔をあげて目があった。
その瞳に俺は「映らない」
返事はない。

「俺は、噂なんて信じない。お前がそんな奴じゃないって分かってる。
だから…俺はお前の味方だ。お前を助けてやる。どんな時でもお前は俺を頼れ。助けてやる。俺を信じてくれ。世界中の人がお前の敵でも、俺はお前の味方だ――――――。」

驚いた目で俺を見る。見つめる。
あ、可愛い（（（（
涙が滲んで、沁みてきて。
大粒の涙が川崎の頬を伝う。零れ落ちる涙。

そして――――――
「ありがとう」

久しぶりに聞いた川崎の声。
それと同時に見た満面の笑み。

――――もっとこんな笑顔がみたい――――
――――この笑顔を守りたい――――
――――俺だけが川崎の笑顔を見てもいい。そんな特権俺にくれますか？――――

あぁ、分かった。
俺は川崎にベタ惚れだ。

１４話「君」２（前書き）

今度は川崎目線の君です。前回の話の川崎Ｖｅｒ．だと思って下されば結構です。

14話「君」2

違う…違うッッ！！
私は取ってなんかいないッッ！！

――――――――――…
私が誰かの好きな人をとったと噂が流れている。でも私は取ってない。
たまたま見た光景。噂の出だし。

濱野に告白したあの女が流していたのを――――――…

何故私？何故私の悪役にしたいの？こんなの悪役にしたって良いこと無いでしょう？
貴方に何か得がある？なんで私なの？

私、奪ってないよ。取ってないよ。
なんで？

「謝れ」

唯そう言われて、殴られて、蹴られて。冷たい目で見られて。軽蔑されて。

「土下座」「死ね」

大丈夫。もう慣れた。

でも、濱野…

どうして君は私を助けてくれないの？――――――

唯、顔を歪ませて私を見るだけ。
私を見つめるだけ。

どうして助けてくれないの？

そんなに友達が大切なの？
曲がったことは嫌いなんじゃなかったの？

結局友達なの？
1人になるのがそんなに怖いの？

ねぇ。今までの君は一体何だったの？

あれ？何で…なんで私はこんなにイラついてるの？
1人なんて慣れてたでしょ？孤独なんて普通でしょ？
誰も助けてくれなかったのが当たり前だったんでしょ？
じゃあ濱野が味方じゃなかったって、助けてくれなかったって
どうって事ないじゃない――――――…

辛いのか、辛くないのか。苦しいのか、苦しくないのか。それは分からないけど。

唯、分かる。私の瞳から光が無くなってるのを。

濱野が居ないだけでこんなに毎日がつまらないものだと思わなかった。

何でかな。濱野がいなかったのが普通だったのに。

それが何年もあった日常だったのに。

濱野が居たのはほんのちょっとだけなのに。

何時から濱野が居ることが普通になったんだろう。

ねぇ何で？

何で濱野が居ないだけでこうも胸が痛むのかな。

何時から「普通」が普通じゃなくなったの？

何時から私はこんな子になったの？

助けない濱野にイライラしてるんじゃない。

濱野が味方に付いている奴らに嫉妬してるんだ。

「川崎」

近づいてきた濱野が発した私の名前

たったこれだけなのに、何でこんなにも嬉しいんだろう。

ちょっと話してないだけで、なんでこんなにも懐かしいと思うんだろう。

「俺は、噂なんて信じない。お前がそんな奴じゃないって分かってる。

だから…俺はお間の味方だ。お前を助けてやる。俺を信じてくれ。
世界中の人がお前の敵でも、俺はお前の味方だ――――――。」

――――驚いた。ビックリした。
濱野は私を裏切った訳じゃなかったんだ。
見限ったんじゃなかったんだ。

まっすぐな瞳。真剣過ぎる眼差し。
あぁ、嘘はついていない。

私を信じてくれるんだ。こんな私の味方をしてくれるんだ。
嬉しいな。ありがとう――――。

涙が私の頬を伝う。うれし泣き…かぁ…。
一体どれぐらい振りだろう。

涙で声がふるえるだろうね。でも、これだけは伝えないと。

「ありがとう」

ニッコリ笑って言えたかな。
濱野が味方ってだけで、こんなに心強いんだね。
こんなにも嬉しいんだ。

いつも、いつでも、これからもずっと、隣にいてくれるかな。
隣に居たいな。隣は誰にも渡さない。

誰にも譲りたくない――――――…

ふと気付いた自分の気持ち。
あぁ…私、濱野が好きだ。響と同じ様に、若しくはそれ以上に濱野が好き。
何でだろ。何で嫌いだった現実(リアル)の男子なんかを――――――…

15話「シークレット」

「はーまのーっ！！」

朝、濱野を見つけては濱野が遠かろうと近かろうと声をかける。
ただ気をひきたいだけ。

「おー川崎。おはよー」

何時も通りボサボサの髪。やる気のない感じの目。ダラッとしたラフな格好。そして右耳には文化部！！の未来の絵が描いてあるイヤホン。
すっごく眩しく感じてしまう私は馬鹿なのだろうか。
顔を見ることも恥ずかしくて出来ない。このまま顔を手で覆って土に潜りたいくらい↑

「ん？その手にある袋…何？」
「ん？あぁ…これ？」

肩にかけてあった袋を手に取り、ガサゴソと袋の中を漁る。

「イエイ！！」

ズイッと濱野の顔の前につきだす。出されたのは全長２０？程度のフンワリした感じの未来のマスコット。

「おまっ！！これはっ！！」

濱野のテンションが上がるのも当たり前。だってこれは難易度が高いと言われているクレーンゲームの景品で、可愛いので人気があるが取れないし数が少ないと言うレア物。

「ふっふっふー昨日私がこれを２つ取ったのだー☆」

クレーンゲームは得意なので対して金は使ってない。１０００円ぐらい。使いすぎだって？でも１０００円で取れたの合計１５個だからどっちかって言うと儲けた方でしょ。多分ね。

「うわーいいなぁ！！」

目をキラキラさせてマスコットを見つめる濱野。

可愛い。という思いと同時に嫉妬、憎悪も芽生えた。
２次元だから次元は違うし、私は可愛くないけどこの子は可愛い。
だから仕方ない。
そう分かってるけど…

どうしても生まれる嫉妬。
あぁ、私もこんなに可愛かったらなぁ。そしたら濱野に好いて貰えたのかな。

「要る？」
「要るッッ！！」

私は、都合のいい女としてでもいい。濱野に私を見てほしい。
気をひかせる。
何だってあげる。勉強だって教えたげる。

ただ、濱野の声が聞きたい。濱野の気をひきたい。傍に居たい。

――――――――…

「濱野！！クッキー要るか？」

「マジ！？くれんの！？ラッキー♪せんきゅーな（ニッコリ」

「ッッ！！／／／／／」

可愛いな。可愛いな。こんな笑顔もっと見たいな。

…もっと…もっと…

――――…

「ふふっ。閑花もやっと自覚したんだね」

「え？」

「好きなんでしょ？濱野君」

ブーッと思わず飲んでいたお茶を噴き出してしまった。

「なっななな／／／」

顔が真っ赤になる。嘘をつけない可哀想なこの顔…↑

「隠さなくていいよ、分かってるから。そうでしょ？」

小さく首を縦にふる

「「でもこれは私たちだけの秘密だよ」」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0005x/

君と私と君と僕

2011年10月26日00時48分発行